

照応と関連性

大津，隆広
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5397>

出版情報：言語文化論究. 14, pp.113-126, 2001-07-12. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：



照 応 と 関 連 性

大 津 隆 広

1. 序

一般的に、照応は言語的要素のみを先行詞とする表層照応と非言語的要素までも先行詞とすることができる深層照応の2つに区別される。そうした Hankamer and Sag (1976) の指摘に続き、分類そのものを精密化する研究 (Sag and Hankamer 1984, Murphy 1985) や分類そのものの是非を問う研究 (Williams 1977, Schachter 1977, Ryck and Verluyten 1981) などが行われてきた。

一見すると区別が明解に思えるこれらの照応にも、非言語的要素を先行詞とする表層照応の例があるのはなぜか、深層照応では言語的要素と非言語的要素を先行詞にする際の違いは何かなどの明らかにされていない問題点がある。本論では、そうした問題も含めた照応のプロセスを Sperber and Wilson (1986/1995) の関連性理論で適切に説明できることを述べる。

2. 従来の研究

2.1. 統語的制御と語用論的制御

(1)は Hankamer and Sag (1976) における照応のタイプの分類を Sag and Hankamer (1984:325)がまとめたものである。

- (1) a. Only deep anaphora can be used deictically, or in the terms of Hankamer and Sag (1976), can be 'pragmatically controlled.'
- b. Only surface anaphora requires parallelism in syntactic form between anaphor and antecedent.

深層照応は語用論的制御を受け、表層照応は統語的制御を受けるとするこうした2分法によれば、表層照応である(2)sluicing, (3)stripping のうち、(2b), (3b)は、先行詞を復元するための言語的文脈がないために容認されない。

- (2) a. Hankamer: Someone's just been shot.
Sag: Yeah, I wonder who.
- b. [Hankamer produces a gun, points it offstage and fires, whereupon a scream is heard.]

- Sag: *Jesus, I wonder who.
- (3) a. Hankamer: Listen, Ivan, he's playing the *William Tell Overture* on the recorder.
Sag: Yeah, but not very well.
- b. [Sag plays *William Tell Overture* on recorder.]
Hankamer: *Yeah, but not very well. (Hankamer and Sag 1976)

しかし、すでに Hankamer and Sag (1976) では、こうした明解な分類があてはまらない例があることを例外として指摘している。彼らは陳述という発話の力をもつ場合には(2b), (3b)と同様に統語的に制御されていなければ照応は容認されないが、(4)のように命令や忠告のような発話の力をもつ場合には表層照応でも語用論的制御を受けると説明する。(4a)は stripping, (4b)と(4c)は動詞句削除の例である。

- (4) a. Not in my wastebasket, you don't.
b. [Hankamer brandishes a cleaver advances on Sag]
Don't! My God, please don't!
c. [If you see that an acquaintance has dyed his hair green, you can say:]
You didn't! (Hankamer and Sag 1976)

しかし、命令や忠告などの発話の力が関わると、なぜ表層照応でも語用論的制御を受けた照応が可能になるのか、また命令や忠告以外にどのような発話の力をもつ場合であれば照応が可能となるのかなど詳しく述べられてはいない。

こうした例外の指摘は Schachter (1977) でもなされている。Schachter が扱う表層照応の例は(5)のように全て動詞句削除である。

- (5) a. [John tries to kiss Mary. She says:]
John, you mustn't.
b. [John pours another martini for Mary. She says:]
I really shouldn't.
c. [The band starts playing, and several couples head for the dance floor. Pulling back his chair and half-rising, John says to Mary:]
Shall we?
d. [John hands Mary the expensive present he has bought for her. She says.]
Oh, John, you shouldn't have. (Schachter 1977)

Schachter (1977) は、話し手の命令や忠告という文脈で表層照応が容認されるのは、陳述文に比べて非陳述文の方が、照応形の先行詞となるものの範囲が狭いからであると説明する。例えば、陳述はいかなることも表現しうののに対して、要求は聞き手が遂行する行為に、質問は聞き手が所有していると考えられる情報に限られる。このような先行詞の指示対象の限定性こそが、先行文脈に言語的要素がなくとも表層照応を可能にするのである。さらに、Schachter は Hankamer and Sag と同様に、動詞句削除が語用論的制御を

受けるケースは稀であると述べている。

しかし、Schachter自身、発話の力が陳述としか考えられない例(6a)でも、動詞句削除による照応が成立するという久野の示唆を挙げている。さらに、語用論的に制御される表層照応は動詞句削除に限らないことを示す例もある。(6b)と(6c)は sluicing の例であるが、どちらも先行詞の復元に言語的要素を必要とはしない。

- (6) a. [A and B are competing in weight lifting. A lifts 300 pounds. B says:]
If you can, so can I.
- b. [A is teaching B how to use a new copy machine.]
C: Show me how.
- c. [As soon as John produces a gun, it goes off before Bob's eyes.]
Bob: Oh, I wonder why.

したがって、Hankamer and Sag (1976), Schachter (1977) とともに、語用論的に制御される表層照応の例(4)-(6)のすべての仕組みを説明することはできていない。

一方、深層照応の場合でも、先行詞を復元するためには照応形がその言語形式に一致する必要がある例を Ryck and Verluyten (1981)が挙げている。(7)では、人称代名詞が先行詞の数を規定する形態的特徴に一致しなければ照応は成り立たない。彼らはどのような照応においても言語的要素が大きな役割を果たしていると指摘している。

- (7) a. [John wants his pants that are on a chair and he says to Mary:]
Could you hand them/*it to me, please?
- b. [Same situation, but this time John wants his shirt:]
Could you hand it/*them to me, please? (Ryck and Verluyten 1981)

そもそも、先行詞を復元する際に必要な要因として、言語的文脈と非言語的文脈を区別する意味があるのであろうか。統語的制御・語用論的制御という対立は、一見すれば2つのタイプの照応を明解に区別するための便利な概念ではある。しかし、われわれが発話を解釈する際にどちらかの要因を選択するようなプロセスは考えにくい。言語的文脈と非言語的文脈をあわせた広い意味でのコンテキストにおいて発話解釈は行われていると考える方が自然であろう。

2.2. 照応形の形態的・統語的特徴

Murphy (1985)は、Hankamer and Sag (1976)の分類の不備を正すために、聞き手が先行詞を復元する際の困難さの程度により照応の2つのタイプを分類している。Murphyによれば、その困難さを決める尺度は次の2つである。

- (8) a. 照応形の先行詞となりうる候補の数がどれくらいあるか
b. 照応形を含む文が先行詞を復元するための糸口をどれくらいもっているか

尺度(8a)は照応形が潜在的にどのくらい多くの先行詞を指すことができるかということであり、その数が少ないほど聞き手は先行詞を容易に復元することができる。逆に先行詞の search space が広げれば復元も困難になる。一方、尺度(8b)は照応形を含む文内に先行詞を探すための統語的あるいは形態的なヒントがどの程度あるかということであり、より多くのヒントがあればあるほど、また照応形を含む文が長く完全であればあるほど、先行詞を容易に復元することができる。そして、この2つの尺度を考慮することで、照応のタイプを(9)のように分類することができる。と述べる。

- (9) a. 照応形の先行詞となりうる候補の数が限定されていればいるほど深層照応であり、限定の度合いが少ないほど表層照応となる。
 b. 先行詞を復元するための情報を文内に多く保持している照応ほど深層照応となる。

しかし、先行詞の復元可能性の尺度に基づくこの独特な照応の分類は、2つの類似した表現の比較による相対的な基準で決められるという点と、あくまでも傾向を表しているにすぎない点に問題がある。例えば、空補文照応(10a)と動詞句削除(10b)を比べた場合、Murphyの分類では大方の予想に反することとなる。

- (10) a. I don't see why you even try.
 b. I don't see why you even try to. (Murphy 1985)

Murphy自身、(10b)の“try to”の方が(10a)の“try”よりも先行詞を復元するのに役立つ情報が文内に多いので、“try to”は“try”よりもさらに深層照応的であると予測し、その予測は正しいと述べている。¹⁾ さらに、“try to”が深層照応だと述べる根拠は、同様の照応形“refuse to”が(11a)のように統語的に同一の先行詞を必要とせず、また(11b)のように、語用論的に制御されることにあるとする。

- (11) a. Sandy: The garbage needs to be taken out.
 Lee: Well, I refused to.
 b. [Each person at the table swallows a goldfish whole.]
 Sandy: Come on, Lee, it's your turn.
 Lee: Not me, I refuse to. (Murphy 1985)

しかし、数名のインフォーマントのコメントによると、“to”の有無は文の容認性には影響はなく、(11b)では“to”がない方がより自然であるとのことであった。(11b)で“refuse to”が優勢であることが正当化されなければ、それを深層照応であると分類することはできない。また、(11a)は“to”がなくとも自然な対話となる。このように、Murphyの分類は主として照応形や照応形を含む文の統語的、形態的な特徴に依拠するために、説明の妥

1) Hankamer and Sag (1976)や他の一般的な研究では、(10b)の“try to”は動詞句削除の例であるとされているが、Murphy自身 Comp-VPEと呼んで区別をしている。

当性には疑問がある。

3. 関連性理論からみた照応

従来の統語的制御と語用論的制御の対立による照応の分析では、先行詞の復元に利用する文脈を言語的文脈と非言語的文脈に区別しなければならない。一方、照応形や照応形を含む文の形態的、統語的特徴による分析では、コンテキストを用いた先行詞の復元の仕組みが考慮されていない。これらの研究は、ともに発話解釈というプロセスの中での照応の仕組みに焦点を当てているとは言えない。実際の発話解釈とは、利用できる文脈を最大限に利用しながら最適な解釈を目指す積極的なものである。また、いかなる照応も先行詞を復元するプロセスには相違はなく、そのプロセスに関わる語用論的、認知的原理も同じであると考えられる。

Otsu (1996)では、表層照応が語用論的に制御される場合、話し手と聞き手が同じ発話の場に共存しており、かつ聞き手は話し手が話題とする出来事とその出来事がどのように進展するかを認識できることが条件であると述べた。例えば、(4)-(6)の例で見られる“*Oh*”, “*My God*”, “*John*”のような感嘆表現や呼びかけは聞き手の注意を発話へ向けさせる役割があり、話し手と聞き手の発話の場の共有を含意する。また、そうした照応形を含む文が通常 quick response を必要とすることも、当該の発話内容に対して両者の関心の度合いが高いことを表している。こうした直感は Sperber and Wilson (1986/1995)の関連性理論により明確にすることができる。

Sperber and Wilson (1986/1995)はコミュニケーションとは意図明示的の伝達行為、つまりある現象に聞き手の注意を向かわせることを意図した伝達行為であると主張する。さらに、そうした行為は自動的に最適な関連性のある見込み（その発話が聞き手が注目するに値するだけの関連性があるという見込み）を作り出す。こうした見込みにより、聞き手は自分にとって最も関連性のある解釈を自然と導き出すことができる。

ある発話が関連性があるということは、言い換えれば、その発話により聞き手の認知環境が良くも悪くも変わる（認知効果をもつ）ということである。²⁾したがって、聞き手に理解されたかどうかかわからないような、あるいは聞き手の心を全く動かさないような（処理すらされないような）発話は関連性をもつとは言えず、そもそも発話と呼べるものかどうかとも疑わしい。

聞き手が発話を解釈する際に行う推論は、聞き手自身の想定と発話の内容をもとに行われる。関連性理論における想定とは、発話時にもっている個人的な知識やものの考え方、一般常識や百科全書の知識などのさまざまなものを指し、さらにそれらの想定は確信に近い根拠のあるものから、推測に近い根拠の弱いものまで様ではない。発話解釈の際には、その中から選ばれた想定の一部と発話内容を前提として新たな結論が導き出されたり（文脈効果の算出）、想定の実信度が増したり（想定強化）、想定が誤りであったことがわかる（想定却下）ことで認知効果が得られ、発話は関連性のあるものとなる。

しかし、発話の関連性はそうした認知効果を得るだけでは保証されない。関連性理論で

2) この点の説明は今井(2000)が的を得ている。

は、聞き手が認知効果を得るために要した労力を関連性を規定するもう一つ概念として挙げる。したがって、多量で不当な労力を費やすことで認知効果が得られたとしても、その発話は最適な関連性をもつものであるとは言えない。発話が最適な関連性をもつためには次の2つの条件を満たしている必要がある。

- (12) a. 注目するに値するだけの十分な認知効果が聞き手に得られること
- b. 認知効果を得るために聞き手に不当な労力がかからないこと

さらに、聞き手が自身の想定を用いて発話の真理条件的意味(表意)を算出するためには、指示対象の同定、省略部分の復元や情報の拡充(富化)などの作業が必要となる。照応の理解のプロセスとは、まさに表意を導き出すために行う指示対象の同定や省略部分の復元のプロセスに他ならない。

以上のような関連性理論の枠組みを用いて、2章で例外として取り扱われてきた照応のプロセスがどのように適切に説明することができるであろうか。

まず、Hankamer and Sag (1976)の例(13)から見ていこう。³⁾

- (13) a. [John attempts to throw a soda can into Mary's garbage carelessly. She says:]
Mary: Not in my wastebasket, you don't.
- b. [Hankamer brandishes a cleaver, advances on Sag]
Sag: Don't! My God, please don't!

stripping(13a)の例において、聞き手である John が Mary の発話を解釈するためには、発話中の“my”の指示対象の同定もさることながら、省略部分の復元を行わなければならない。さらに、発話の場において、Mary および当該の出来事に関する John の想定の中に(14)のような想定が含まれており、これらも発話の解釈に利用される。Mary を目の前にした発話の状況において、彼女のゴミの中に空き缶を投げ捨てる行為に関して John が何ら想定を持ちえないということは考えにくい。

- (14) a. Mary doesn't want John to throw the soda can in her wastebasket.
- b. Mary doesn't care whether John throws the soda can in her wastebasket.

想定の内容(あるいはその確信の強さ)はさまざまであり、John は想定(14a)のように確信犯的に Mary がいやがることを予想していることもあれば、一方では(14b)のように、(14a)とは異なる想定をもっている場合もある。しかし、どちらにせよ John は自分の既存の想定と Mary の発話内容により認知効果を得ることになる。つまり、想定(14a)に(13a)の発話内容が加われば、その想定が強化されることとなり、逆に(14b)に発話内容が加われば、その想定が却下されることになる。Mary の発話により John の認知環境が変わらないこと(Mary の発話が John にとって関連性を持たないこと)はありえない。このように、

3) (13a)のコンテキストは筆者が加筆したものである。また、(13)以降の例では、発話の関与者の関係が明確になるように、発話者名を加筆している。

発話(13a)の表意は John 自身の想定を利用することで決定される。言語的要素が先行文脈になくとも表層照応が理解されるのはこうしたプロセスによる。また、(13b)に関しても、聞き手 Hankamer は(15)のような一般常識に近い想定をもっていると考えられる。想定(15)と Sag の発話(13b)が前提となり、想定が強化されることで発話の表意が決定される。

(15) No one wants anyone to brandish a cleaver at him/her.

Schachter (1977)の例(16)でも、関連性理論を用いることにより、表層照応でも語用論的制御が可能なが説明できる。

(16) a. [John tries to kiss Mary. She says:]

Mary: John, you mustn't.

b. [John pours another martini for Mary. She says:]

Mary: I really shouldn't.

c. [The band starts playing, and several couples head for the dance floor. Pulling back his chair and half-rising, John says to Mary:]

John: Shall we?

例えば、(16a)、(16b)の発話の場での聞き手 John の Mary に対する想定には、それぞれ(17a)、(17b)のようなものが考えられる。

(17) a. Mary wants John to kiss her. / Mary doesn't want John to kiss her.

b. Mary wants to drink another martini. / Mary doesn't want to drink any more martini.

(16a)の場合には、(17a)のように、Mary あるいは当該の発話の場に関する John の想定の中には、Mary は自分のキスを受け入れてくれるであろうという想定やその逆の想定が含まれていると考えられる。また、(16b)も同様に、Mary がもう一杯マティーニを飲みたいかどうかに対する John の想定には肯定、否定の両方の側面が考えられるであろう。したがって、それぞれ(17a)、(17b)において、前者が John の既存の想定である場合には、Mary の発話内容の表意を復元するプロセスをとおしてその想定が却下され、後者が既存の想定である場合にはその想定が強化されることになる。一方、(16c)では、ダンスパーティーの会場での発話であるので、聞き手 Mary の John に対する既存の想定の中には(18)があるであろう。その結果、省略部分の復元により(16c)の表意が決定され、聞き手 Mary の想定(18)は確信へと変わるのである。

(18) John wants to dance with someone.

命令や忠告のような発話の力をもつ場合であれば表層照応は語用論的に制御されうるという Hankamer and Sag (1976)や Schachter (1977)の指摘は、関連性理論で的確に捉え直

すことができる。(13)や(16)のような拒否、命令、依頼などの発話の力をもつ発話が聞き手の認知環境を変えるだけの関連性を持つのは、その発話自体が、意図した行為の中止や何らかの行為の遂行などの肉体的、物理的負担を聞き手に強いるためであろう。

次に、(19a)、(19b)のような sluicing の例では、どのように表層照応が語用論的に制御されることで発話の解釈が行われているのであろうか。

(19) a. [A is teaching B how to use a new copy machine.]

C: Show me how.

b. [As soon as John produces a gun, it goes off before Bob's eyes.]

Bob: Oh, I wonder why.

(19a)と(19b)における発話の聞き手であるA(かつB)とJohnは、それぞれ(20a)、(20b)のような既存の想定をもっていると考えることができる。

(20) a. C also wants to know how to use the new copying machine.

b. Nobody has thought that the gun will go off.

(19a)においては、発話の場にCも居合わせていることが他の二人には既に情報として認識されており、当該の出来事にCも関心があるに違いないという想定(20a)を聞き手A(かつB)がもっているであろうことは容易に想像できる。また、(19b)において、銃が目の前で発射されるという事態は誰も予想しないことがらであるという一般的な想定(20b)をJohnはもっている。従って、(19a)、(19b)ともに聞き手の想定と話し手の発話が前提となり発話の表意が算出されることで、先行詞の復元が行われることになる。

一方、動詞句削除が語用論的に制御される陳述の例(21)においても、関連性理論により照応の成立を説明することができる。

(21) [A and B are competing in weight lifting. A lifts 300 pounds. B says:]

B: If you can, so can I.

(21)の発話の場において、AとBは共に競技のライバル同士であるので、Aの想定の中には、自分が300ポンドを上げれば、Bも同量のウエイトを上げることができると思うだろうという想定が含まれている。従って、Aは(22)のような既存の想定をもっていると考えることができる。

(22) B thinks that he can also lift 300 pounds or more.

ここでも、代名詞の指示対象の同定や省略部分の復元により(22)の表意が決定されるプロセスをとおして、先行詞の復元が行われている。発話の力が命令や忠告でなくとも、解釈の際に聞き手の想定が生かされれば、その発話は聞き手にとって十分な認知効果をもたらす。事実、Aの想定(22)はBの発話(21)により確信へと変わるであろう。

これらのすべての発話は、自らの想定強化と却下により認知効果を得るという点で、聞き手にとって関連性があると言える。これに対して、先行詞の復元において語用論的制御が不可能とされる表層照応の例(23)は、発話解釈に役立つどのような想定を聞き手がもっているのか特定できない。

- (23) a. [Hankamer produces a gun, points it offstage and fires, whereupon a scream is heard.]
 Sag: *Jesus, I wonder who.
 b. [Sag plays *William Tell Overture* on recorder.]
 Hankamer: *Yeah, but not very well.

(23a)では、銃を撃った本人が同定できているのにこのような発話を用いるのは会話の原理に違反していると言えるので、あくまでも Sag は誰が撃ったかを知らないと考えよう。その場合、Hankamer (あるいは第三者) が Sag および当該の出来事に対してのもつ想定の中には、少なくとも(24)のような2つの想定が含まれているであろう。

- (24) a. Sag thinks that someone shot a gun.
 b. Sag thinks that someone was shot by a gun.

発話を解釈する際に聞き手自身の想定が一つに決まらないということは、発話解釈に余計な労力が必要であるということである。⁴⁾ 一方(23b)では、Hankamer が Sag の演奏場所に居合わせていたかどうか不明であるし、Hankamer が当該の出来事に対してどのような想定をもっているかも Sag には明らかではない。従って、発話解釈を行うためには、考えられるさまざまな想定をひとつひとつ検証しなくてはならないので、かなりの不当な労力が必要になる。(23a), (23b)は関連性の極めて低い発話であり、発話の表意の決定(つまりは先行詞の復元)は容易には行われまいと言える。

さらに、(25)のように、深層照応においても形態的要因が先行詞の復元に関わっているという Ryck and Verluyten (1981)の指摘も関連性理論を用いて説明することができる。

- (25) a. [John wants his pants that are on a chair and he says to Mary]
 John: Could you hand them/*it to me, please?
 b. [Same situation, but this time John wants his shirt]
 John: Could you hand it/*them to me, please?

(25a), (25b)の発話解釈に関わる Mary の想定にはそれぞれ(26a), (26b)が含まれていると考えられる。

4) Murphy (1985)は(23a)や(23b)で照応が適切に成立しないのは、省略部分を埋めるのに可能な先行詞の幅が広すぎて絞り込めないからであると説明するであろう。結局、これも発話解釈に用いる想定を聞き手が最小限の労力を使って特定することができないからである。

- (26) a. John wants to take his pants. / John wants Mary to hand his pants to him.
 b. John wants to take his shirt. / John wants Mary to hand his shirt to him.

この場合、(26a)、(26b)の Mary の想定は、John の依頼が発せられる前から既に存在していたと考える必要はない。椅子の上に John のズボンやシャツが置かれているという事実は、視覚的情報として Mary 自身すでに認識しているので、(26a)、(26b)は John の発話を聞いた後にさまざまな想定の中から最も瞬時に取り出すことができる想定だと言える。そうした処理労力の省力化は関連性理論により保証されている。

Ryck and Verluyten は、これまで考察してきたような非言語的文脈から先行詞が復元されるプロセスを説明する語用論的原理と、先行詞がその非言語的文脈のどこに存在するのかを説明する必要があるという問題点を指摘している。関連性理論が説明するとおり、照応形の先行詞は、発話解釈の際に最も容易に取り出されかつ利用される聞き手の想定の中にある。聞き手の想定内に照応形の先行詞を復元することができるのは、その想定が発話解釈に大きく寄与しているからである。

最後の問題として、Murphy (1985)による照応の分類における不備を関連性理論ではどのように説明することができるのであろうか。Murphy では(27)の "refuse to" という形式を深層照応だと誤って予測した。

- (27) [Each person at the table swallows a goldfish whole.]
 Sandy: Come on, Lee, it's your turn.
 Lee: Not me, I refuse to.

Lee の発話を聞いて Sandy がその表意を決定するプロセスには、やはり Sandy 自身の想定が深く関わっている。金魚を丸ごと飲み込むということは非日常的な行為、あるいはふざけた遊びであり、Sandy が "Come on" とはやし立てるさまから、当該の行為を Lee は決して好んで行うのではないということ（いわば一種の挑戦であるということ）は Sandy 自身も理解しているであろう。したがって、Sandy の想定の中には(28)のような想定が含まれていると考えられる。

- (28) Lee doesn't want to swallow a goldfish whole.

この Sandy の想定は省略部分の復元をとおして Lee の発話の肉付けを行い、照応を成立させる。関連性理論の枠組みによれば、"refuse to" という形式が表層照応であっても、聞き手の想定が発話の解釈に役立つものとして容易に取り出しが可能であれば、発話内容と結びつくことで発話の表意が決定され、照応が成立することを説明することができる。

一方、(29)において、Sandy が照応形を含んだ Lee の発話を解釈する際に、最終的には同じ認知効果を得るのであれば、自身の想定を取り出すよりも Sandy の発話をもとにして先行詞を復元の方が費やす労力は少なくすむはずである。言い替えば、発話解釈に利用できる言語的要素があるのに、他の種々の想定をわざわざ取り出して発話解釈のために検証するという面倒なことをするようでは、発話の関連性は高いとは言えない。

(29) Sandy: The garbage needs to be taken out.

Lee: Well, I refused to.

前章で、(27)および(29)に関するインフォーマントの調査によれば、“refuse to”よりも“refuse”の方が自然ではあるが、どちらを用いても大きな違いはないということ述べた。つまり、これらの発話が聞き手に関連性をもつという保証のもとでは、照応形がどちらであろうと先行詞を容易に復元することができるのである。(30)において、統語的に同形式の先行詞が直前の言語的文脈にあるのに、表層照応ではなく深層照応が用いられていることから明らかであろう。⁵⁾

(30) a. ‘She spoke to us,’ he continued (and I could almost hear the sea-woman’s voice), ‘telling us her name was Vellanserga, and inviting us to go with her into the cathedral. I refused; but the girl went, and was never heard of again.’ (LOB: K12 147-150, 下線は著者)

b. “That boy! That damned fool boy! What does he mean by trying to come home now, even if he did promise? What does time mean when weighed against the life of two human beings?” (LOB: N03 118-110, 下線は著者)

Sag and Hankamer (1984)では、2つのタイプの照応の処理に関わるプロセスの違いに記憶という概念を持ち出している。表層照応は削除された要素の復元によるので、直前の談話内の文の命題表示を先行詞とし、その表示は時間の経過とともに消滅すると説明する。それはいわば短期記憶によるものなので、談話のトピックが変わってしまった場合には、表層照応は成立しない。それに対して、深層照応はもっと広い文脈内の談話モデルから先行詞を復元できるので、そうした制約はないと述べる。(31)は談話の開始から30分経つうちに他の談話が介在したために、途中で談話のトピックが変わっている。

(31) E: Good morning. I would like for you to reassemble the compressor...

E: I suggest you begin by attaching the pump to the platform...(other subtasks).

A: All right. I assume the hold in the hosing cover opens to the pump pulley rather than to the motor pulley.

E: Yes, that is correct. The pump pulley also acts as a fan to cool the pump.

A: Fine. Thank you.

A: All right, the belt housing cover is on and tightened down.

(30 minutes and 60 utterances after beginning.)

Sag and Hankamerによれば、(31)の談話の最後に、Eが表層照応(32a)を用いた場合、聞き手Aは最初のトピックに関する内容から先行詞として“to assemble the compressor”を復元することはできないが、深層照応(32b)はそれが可能であると説明する。しかし、

5) 中右(1994)は、“refuse”が“refuse to”と同じ解釈を達成できるのは、語用論的合意によると説明する。関連性理論はそうした語用論的推論のプロセスを理論的に解明したものであると言える。

この分析の最大の問題点は、どのくらい時間がたつと表層照応では先行詞を復元することができなくなり、深層照応ではいつまでたっても先行詞を復元することができるのかという根本的な疑問にある。

- (32) a. E: *Fine. I knew you know how ϕ . [ϕ =to reassemble the compressor]
 b. E: Fine. You've succeeded ϕ . [ϕ =to reassemble the compressor]

関連性理論では以下のように説明できる。(32a)の表層照応が成立しないのは、それを解釈するために最も容易に役立つ想定を取り出すことができない（つまり、発話解釈にどのような想定を利用してよいかわからない）からである。極論を言えば、適切な想定を取り出すために過去の話を思い出し、それに関する想定をひとつひとつ取り出し、発話と照らし合わせることもできるかもしれない。しかし、そうするには相当に無駄な労力が必要となり、(32a)は最適な関連性をもつ発話とは言えない。これに対して、(32b)では、何をうまく成し遂げたのか、記憶の中からその先行詞を復元するのに役立つ想定を取り出すのに要する労力は(32a)に比べると少なくすむであろう。つまり、(32b)の発話は聞き手による想定の絞り込みを容易にさせ、その結果、先行詞の復元も容易になるのである。

4. 結 び

最適な関連性を目指すためには、聞き手はもっとも容易に取りだせる想定を用いた発話解釈を行う。したがって、表層照応、深層照応ともに言語的文脈、非言語的文脈の両方を利用して先行詞の復元を行うと考える方が自然であり、これは関連性理論により支援される。2つの照応ともに言語的文脈があればそちらをまず利用した先行詞の復元を行うのは、聞き手の想定に依存する（つまりさまざまな想定を取り出す）という労力を要する作業を行うよりも、言語的要素を先行詞とする方が労力が少ない分だけ関連性が高いからである。ただ、言語的文脈がなければ、聞き手自身の想定などの非言語的文脈に依拠せざるを得ない。その際には、労力になるべくかからないこと（つまり発話解釈に用いる想定をできるだけ容易に取りだせること）が条件である。発話解釈に関わるこのような認知能力は人間が本来備えている能力であると言える。

今後は、発話解釈に最も容易に利用される聞き手の想定が複数の想定の中から取り出されるプロセスについて、さらに詳細な研究が必要である。

参考文献

- Ariel, M. 1994 Interpreting Anaphoric Expressions: a Cognitive versus a Pragmatic Approach. *Journal of Linguistics* 30: 3-42.
 Bearth T. 1999 The Inferential Gap Condition. *Pragmatics* 9: 249-280.
 Carston, R. 1996 Enrichment and Loosening: Complementary Process in Deriving the Proposition Expressed. *UCL Working Papers in Linguistics* 8: 1-30.
 ——— 1998 The Semantics/Pragmatics Distinction: A View from Relevance Theory. *UCL*

- Working Papers in Linguistics* 10: 1-30.
- Grice, H. P. 1975 Logic and Conversation. In: P. Coke and J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics* 3: Speech Act, 41-58. New York: Academic Press.
- Hankamer, J. and I. A. Sag 1976 Deep and Surface Anaphora. *Linguistic Inquiry* 7: 391-426.
- 今井邦彦 1995 「関連性理論の中心概念」『言語』24巻4号: 20-29. 大修館
- 2000 「関連性理論とはどういう理論か」『英語青年』146巻7号: 2-6. 研究社
- 今井邦彦他 2000 関連性理論研究集会 (学習院大学), ハンドアウト
- Kehler, A. 2000 Coherence and the Resolution of Ellipsis. *Linguistics and Philosophy* 23: 533-575.
- Matsui, T. 1998 Pragmatic Criteria for Reference Assignment: A Relevance-theoretic Account of the Acceptability of Bridging. *Pragmatics & Cognition* 6: 47-97.
- Murphy, G. L. 1985 Psychological Explanations of Deep and Surface Anaphora. *Journal of Pragmatics* 9: 785-813.
- 中右 実 1994 『認知意味論の原理』 大修館
- Nicolle, S. 2000 Communicated and Non-communicated Acts in Relevance Theory. *Pragmatics* 10: 233-245.
- 西山佑司 1995 「言外の意味を捉える」『言語』24巻4号: 30-39. 大修館
- Otsu, T. 1996 Surface Anaphora/Deep Anaphora and Conversational Inference in English. *Studies in Languages and Cultures* 7: 97-111.
- Ryck, L. T. and S. P. Verluyten 1981 Pragmatically Controlled Anaphora and Linguistic Form. *Linguistic Inquiry* 12: 153-154.
- Sag, I. A. and J. Hankamer 1984 Toward a Theory of Anaphoric Processing. *Linguistics and Philosophy* 7: 325-345.
- Schachter, P. 1977 Does She or Doesn't She? *Linguistic Inquiry* 8: 763-767.
- Sperber, D and D. Wilson 1995[1986] *Relevance: Communication and Cognition*, 2nd edition. Cambridge: Harvard University Press.
- 内田聖二 1993 「関連性理論とコミュニケーション」『言語』22巻7号: 62-65. 大修館
- Williams, E. S. 1977 On "Deep and Surface Anaphora." *Linguistic Inquiry* 8: 692-696.
- Wilson, D. and D. Sperber 1993 Linguistic Form and Relevance. *Lingua* 90: 1-25.

Anaphora and Relevance

The presupposition that surface and deep anaphora involve different modes of anaphoric processing has been widely accepted. However, the question of why some examples of surface anaphora are pragmatically controlled and of what pragmatic factors determine the choice of either linguistic or nonlinguistic context have not yet been properly examined, except for ad hoc explanations. This paper deals with these problems by focusing on the assumptions the hearers use in utterance interpretation. In any case of anaphoric processing, both linguistic and nonlinguistic context can be used to recover antecedents. If linguistic context is available, antecedents can be recovered on the basis of syntactic clues. If not, antecedents are recovered in the assumption the hearers can access with least effort. Such an anaphoric processing is consistent with the principle of relevance proposed by Sperber and Wilson (1986/1995).